# 明治の女子

明治四十一年十月十五日發行
明治三十七年五月七日第三種郵便物認可

明治の女子
第五巻第九

## 西風號

明治四十一年
十月十五日發行

●爾曹の笑を悲哀に易よ……一記者
▼恐怖の實驗……大坪秋人
▼ブラウニング「サウロ」を讀む……河井道子
●植村先生の「宗教の撰擇」を讀みて……木山一夢
▼水の精（承前）……辻村靖子
▼憐れなる母子……川副生
●ラオダマイア夢物語……櫻喬生
▲祈禱の一週日（附錄）▼



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

# 明治の女子

「明治の女子」は日本基督教女子青年會中央委員が發行する機關雜誌也。
「明治の女子」は一年分郵税共金五拾錢一部郵税共金五錢とす。
日本基督教女子青年會は青年女子の衛生、社交、智識、靈性上の發達を計るための團體也。
日本基督教女子青年會中央委員左の如し。

委員長 エム、エ、ホイツトマン
副委員長 岡見惠子
記錄書記 エ、ジー、ルイス
會計 フィシヤー
萬國基督教女子青年會同盟委員 河井道子
萬國學生基督教同盟會委員 宮川すみ子

東京在住委員
津田梅子 渡部瀧子
エ、ピー、ウエスト 井上友子
平野濱子 鈴木歌子
中島小春 井深花子

地方在住委員
大坂 ケー、ツリスツラム 京都 松田道子
京都 ジ、エス、フエルプス 仙臺 エル、ザフルー
名古屋 イ、エム、ソーパル 廣島 エヌ、ジー、ゲインス
日本女子基督教青年會幹事 エー、シー、マクドナルド
同副幹事 エス、シー、フヰツシヤー


明治四十一年十月十三日印刷
明治四十一年十月十五日發行

東京市麹町區土手三番町十五番地
發行兼編輯人 エー、シー、マクドナルド

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷人 島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所 三秀舍


日本基督教女子青年會の事に付き御尋ねの節は東京麹町區土手三番町十五番地同會事務所宛にし御尋相成度候



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

# 「西風吹けよ、吹けよ西!!」

秋來ぬと眼にこそ見えれ
豪蕩吹きすさむは西風
凄蒼黄色赤に夕陽に
亂れちり布く數萬の木の葉。

せわしや擔架一障の西風
雲煙十字西へ東へ
みそらに寒き深夜の星な
衾したうか窓打つ木の葉。

なつかし木の實貫しや種子
現世氷塊と野原は枯るとも
又來む春光の愛は變らで
女神の樂音に幸はみち滿つ。

眠れる此の世死せる園邊
動ける靈の力しらずや
破壞と建設汚穢罪惡たちて
西風吹けよ、吹けよ西風!!

（シエレー「西風吟」の一節）



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

# 汝等の笑を哀哭に易へよ。

なんぢら苦め悲め哭け、爾曹の笑を哀哭に易よ。なんぢらの歡樂を憂に易よ………（雅各書四章第九節）

總じて此の世には現はれたる部分と隠れたる部分との二面がある。形式を具して吾人の肉眼に顯然たるもの內容深く潜むで中心となり無限大の動力となるもの、此の二者の間に截然たる境界線の畫せられて居る事實は今更事新らしく此處に申述る必要もあるまい。

だが我等人類同胞は稍ともすると眼前有形の小事物に固着して、其の奧に沸々として湧き返つて居る一種强大な力の潜在を忘却し易いものである。有形の事物は誰の眼にも一見して直ぐに分解るが、然し無形的一大勢力となると、却々一寸では見分けがつき兼ねる。云はゞ現實に活きて現實に狂する。之が一般人類なるものゝ常狀であらう。

成る程、現實は我等人類の立脚地であり又活舞臺でもある。吾人の立脚地て活舞臺である以上、到底我等は現實と絕ち現實と離れては、生存の全意義を完ふすることは出來ぬ。さればとて現實即生存の全部と解しては其處に又非常な空虛と寂寞の感想とが、我れ知らず深奧の胸裡を突いて湧き起つて來る。所詮我等は現實に養は

れ現實と云ふ檜舞臺の上に動き働いて居るとしても、尙その根本を深く穿ち穿つて終には宇宙本體の眞髓に到達しなければ已まない一種切なる慾求を有て居るものである。此の現實と宇宙萬有との眞相を窮め盡さむとする道程に於て、幾多困難と誘惑、苦しみと悶の難關とが橫はつて居るのである。

同じ雅各書の第四節には、「罪人よ、爾曹の手を清くせよ。二心のものよ、爾曹の心を潔くせよ」とある。吾等は先づ第一着に自己を清め衷情を靜平にすることが根本的に必要であらう。心清明ならざれば信仰は成り立たぬ。慾心多く心を二つ三つにして居ては決して神の聖能に沐浴することは出來ぬ。如何程美しい湖畔の水も波立ち震動て居ては圓かなる天上の明月を映すことは思も寄らぬ。さりとて濁れる水は例令靜平の狀態にあるとしても完全に清らなる星光を宿すには足りない。あゝ罪に穢れたる我等同胞は、須く先づ自己の胸裡を淨化せねばならぬ。心の道を二つに分てる我等人類は須く其が奥を清めて進路を一決せねばならぬ。此に始めて神の光は現はれる。芳はしき御姿は我等の眼前に近く現じ給ふのである。

我等にして若し衷心自己の胸を靜め、胸裡の清淨を圖つたならば、雨の日、風の晨、隨喜の涙が湧き起らないであらうか。喜悦感謝が燃えないであらうか妙に美しと見る高根の月も胸の苦悶の滅せぬ限りは如何して賞嘆讚美の眞情が感受せられやうぞ。我等にして若しも唯胸裡の喜悦だにあらば神の聲も水車の軋る音も、雨の雫風の泌々たる中にも、必ずや無限の喜悅があり樂音があり神の御聲が聞けるに相違ない。あゝ苦しみ悲しみ惡ひ惱み、皆是れ自己心情の表現たる不淨無明の一標象ではあるまいか。

さるにても神は何故に我等人類に向て「悲しみ苦しみ泣け」とは仰向たのであらう。仁慈に滿ち愛を唯一の生命として絕へず恩愛の眼を見張りつゝ吾等人類を見そなはす父なる神が、何故に斯かる矛盾な冷酷な宣言を發し給ふたのであらう。吾等は之を神の御言葉としては一寸奇怪異樣の感に打たれざるを得ない。之が若しも文

字通りの淺い意味で「人は決して笑ひ樂むではならぬ。常に悲しみ憂ひ泣くべきものである」と云ふやうな解釋法を取る人があつたならば、其れこそ前述べた皮相の見に蔽はれ一方に囚はれた罪人である。吾人は其が內容深く突入して須く中心に潜在する眞意義に就て深く翫味するの餘裕がなければならぬ。

何が故に父なる神は我等愛兒に向て「汝等悲しみ苦しみ哭け」とは仰せられし。我等人子は須く先づ胸間紛々の塵を清め心情汚濁の雲を掃て靜かに這般の妙味を味ひ、衷心の意義に耳を傾けねばなるまい。

若しや、我等が或る災厄に出會ひ、ある困難の境致に沒入したる場合に、朧かながらも「神、我等と苦を共にし給ふ」と云ふ確信が起つたならば、此の苦痛此の惱み、吾人に取つては却て一大の歡喜ではあるまいか。愛するもの、慈愛の父と共に苦しみ惱む、之れ慥かに喜悅である。幸福である、救主キリストも一度は此の苦き苦痛の中に立ち給ふた。現在と雖も尙ほ其が尊き血潮の一滴は幾多汎百の罪過を贖ふて餘りあるではないか。前途は希望であり光明であり樂園である。現下の苦痛は決して苦痛其物を以て盡き滅ぶるものではない。我等が普通に考へるよりも一層二層無限大の意義が潜むで居る。此の自覺に到達するのが人間として眞に勝利の第一步に踏出たしたものではあるまいか。

愛する者よ、爾曹を試むる火の如き苦痛を非常事の如くして爾曹異しと思ふ勿れ。却てキリスト、イエスの苦みに與るを以て歡喜とすべし。されば其の榮の顯れむ時亦汝等喜び躍らむ…………(ペテロ前書四章十二―十三)

吾等は如何なる場合、如何なる境遇にあつても此の確信――火の如き苦痛も常事の如く甘受する――此の覺悟が必要である。「苦痛も異しとせず、却てキリスト、イエスと共に苦に與るの榮を得る」と思へば我等の喜悅は果して如何ばかりであらうか。おゝ彼のバビロンの城下に久しく桎梏の苦痛を甘受し人間極度の迫害をも笑て忍だ猶太人は何と偉大ではないか。彼等は初めよりして當時の苦しみを以て決して終生を送らうとは思は



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なかつた、只此の悲境の中にもなほ一點高火の焔を認めて神に救はれ其が限りなき恩愛の御手に接するを得るものとの確信を抱いて居たのである。さればこそ彼等はあれ程の災厄苦痛も笑て甘受した、のみならず、却て「父と苦しみを共にする」喜びを獲得したのである。

「あゝ罪多き人よ、爾曹苦しみ悲み哭け」此處に人間の混りなき崇高極美の至情が示視されないであらうか。人は笑て居る時よりも却て苦しみ哭いて居る時分がより多く神の膝下に近づき易い。之と同樣に年中笑て喜て居る人よりか或は悲しみ泣いてる人の方がヨリ多く幸福であるのかも知らぬ。涙は時に吾人の胸裡に鬱積した塵を掃ひ、汚濁の雲を拭ひ取るバプテスマである。苦痛なき生活悲しみ哭くことを知らぬ生活は決して幸福なライフと云ふことは出來ぬ。悲しみ餘つて泣く、此の至情の涙こそは吾等のあらゆる汚れと塵とを拭ふて、眞に貴き喜悦と平和とを附與するものであらう。

我等は一陣の雨晴れて芳草庭前に薫り、玉露點滴たる青草の末に月光宿る刹那の景色を、無限無量の美感を以て賞味する。雨は宇宙自然の一大沐浴である。バプテスマである。之あるが爲に世は不充分ながらも黄塵の垢を流し穢れの塵を消し去ることが出來る。何故なれば人はあゝも雨を厭がり風を嫌ふのであらう。雨後の晴天、大風後の寂味を喜ぶ至情は我も人も同一であるとすれば、風雨其の者に向ても亦一部の感謝と賞辭とを捧ぐるのが至當ではあるまいか。否實際に見ても雨ほど美しい靜のなものはあるまい。纎弱にして絹糸を天地に垂らしたやうな春の雨、瀟洒にして豪壯崇美の光景を點する夏の雨　何だか膚寒いやうで物憐れな秋の時雨皆それ〲に無限の妙味を匂はして居る。是を心より己のが胸裡に受け入れて樂しみ喜悦の一部となし得ると否とは、人各自に依て多少の相違はある。が然し出來ることなら我等は朝た夕な雨の中に風の音に、さては月に星に草に木に靜かに宇宙萬有を美化し神化して、自己衷情の歡喜を樂でみたいと思ふ。（十月三日早稻田友愛學會に於て）

# 眞理の自由

イエス己を信ぜしユダヤ人に曰けるは、爾曹もし我道に居ば誠に我弟子なり且つ眞理を知らむ。眞理は爾曹に自由を得さすべし。……………………（約翰傳八章三十一―三十二）

此に引用した一節の眞理なる語が果して如何なる意義を有して居るのかは知らむが、若しも世の中の眞相、宇宙自然の眞義てあるとすれば、生は此の妙なる一語に就て、少しく歩調を合せて我が感想の一端を申し述べて見たい思ふ。

世の中に誰だつて自由を望まないものはあるまい。自由のない生涯は所詮は是れ禽獸虫魚にも劣つた生活である。「自由を與へずは我に死を與へよ」Give me a liberty or death! とは正義の武具を取た獨立當時の亞米利加國民が等しく叫び出した衷情の聲てはないか！

けれども自由と云ふことが單に我等が意の儘、思ふが儘の生涯てあるとすれば其れは勿論無意味のもので吾等の齒牙にもかくるに足りない愚論てある。何となれば吾人の慾求ば必ずしも至醇至高のものとのみ見ることは出來ないのてある。唯キリストイエスの喝破し給いし「爾曹もし我が道におらば誠に我弟子なり且つ眞理を知らむ………」と云ふ境涯にあつて始めて眞の自由、眞の生命を得ることが出來ると思ふのてある。

此の自由を歡受し、此の生命を贏ち得たらむものに取りては、所詮之れ神の愛を自己一身に蒐めて永劫變ることなき自由の悦樂を喜べるものてある。如何なる人爲的迫害、如何なる羈絆の束縛も之を害ふことは出來ぬ。

一度世の眞相を理解し宇宙自然の本體に觸れ、神の懷かしき御顏に接したらむものには如何なる苦しみ如何なる惱みも拘束することは出來ぬ。況んや人爲的束縛――例へば牢獄の如き――單に肉體上の監禁をのみ課する

場合にありては恐らく些の影響をも與ふるに足るまい。試に歴史を播いてバンヤンの生活を觀よ。ソークラテスの境涯を味へ。ドイッチエービベールの翻譯者たるマーチン、ルッテルの生涯を見たらば、慥かに活ける例證を我等の眼前に提起するに違ゐない。彼等は一旦不幸にして牢獄の人となり肉の拘束の爲に十數年を暗黒の一室内に過ぐしたとは雖も其が内心深く潛める靈の焔は熾然として燃え上り湧き返り、小暗い獄舍も爲に天上化し樂園視せられて、自由の氣は室の内外に滿ちみちたではないか。牢獄既に然り、況や現世の羈絆をや。彼等が一種妙なる崇美の心情は如何して之位な人爲的拘束を以て眞平不變の自由を左右することが出來やうぞ。あゝ眞に宇宙自然の眞髓に觸れ、父なる神の慈愛に浴せるものは何とそれ幸福な人ではあるまいか。

僕はヲーヅヲースの詩を讀む度毎に、いつも非常に深い感興を催すのが常である。我等人類が狹い小さな室を出て廣漠森嚴な郊野の風光に接する時に、自然の美趣は眼前近く赤裸々の形を以て展開して來る。樹々の緑り風の音、木の葉の囁き鳥の聲水の音さては優しい野路の草花までが、何だか斯う生々として葉末の風に搖らいて居る。もしや之が淺薄平凡な我等であつたなら「あゝ好い景色だ好い氣持だ。秋は野原に限る！」位な所で、別に深い神の御聲に耳傾けるやうなことはあるまい。次の日曜にも、友人や小供などゝ一所に遊びにくる。盛に笑ひ盛に樂しむ。けれども我等が眼には此の崇高偉大の大宇宙大自然も矢張り終始默然として眠つて居る。死むで居るとしきや思へない。だから我等は人間以外の者――樹や花や草や川や――皆之れ無用の死物と觀するのである。此に至ると神を認めて居る人は實に偉い。一口に云へば悧怜だ、敏捷だ、聰明なのだ、ヲーヅヲースの如き又實に此の偉い怜悧な敏捷な聰明な一人である。

彼は心よりして宇宙の萬物を活した。死せる眠れる無言の草木樹葉に向て活ける言辭を以て應答した。別稿記載のラオダミア物語の如き確かに此の種の好適例と思ふが――彼れヲーヅヲースは郭公を歌ひ雛菊を詠じ、花間

に喜戯する胡蝶を活かして萬有皆之れ神子であるといふ信念を最も明瞭に示現したのである。すべてが皆纖細(こまやか)な同情と信仰との念に溢れて萬人に無生物視せられた鳥獸草花をも生々たる活物化したのである。彼が眼(まなこ)には總ての自然は等しく之れ神の默示である。神の化身である。此等一切の自然を通じて宇宙の眞體に觸れ神の本體に接觸するのである。所詮は之れ萬有皆神教である。純にして純なるパンセイズムである。然り神は至る所に在(い)まして我等を照覽し給ふ。神の御聲は宇宙至る所に滿ち〳〵て居る。沙翁(シェークスピヤ)が喜劇(コメディー)「御意のまに〳〵に」"As you like it" の中には

He conld find tongues in trees, books in the running brooks, sermons in stones and good in everything.

の一節が見へて居る。あゝ「樹林の聲に耳をすまし、流れゆく小川の音(おと)に妙(たえ)なる御諭示(みさとし)を讀み、石の中に乃至は凡百の事物の上に神の御聲を接取する。」何と云ふ幸福な境涯ではないか。

あゝ人はキリストイエスの教へ給ひし如く、眞に神の道に從ひイエスの忠實なる弟子として心より眞理の光明(ひかり)を認めねばならぬ。此に始めて直の自由があり眞の生命(いのち)があると思ふのである。（九月十九日早稻田青年會寄宿舍に於て）

# 至醇の愛

新約哥林多前書の第十三章は吾人に向て偉大なる愛、眞義に於ける愛情なるものに就て深き教訓を垂れて居る。約翰第一書の數節と共に吾等の深く玩味すべき重要の部分であると思ふ。「夫れ信仰と希望と愛と此の三つの



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ものは常に在る也。此の中最も大なるものは愛なり」と喝破したヨハネの心眼は實に偉大なものではあるまいか。

然らばヨハネの視たる愛――我が呼で至醇の愛――と云ふのは抑如何なる意味の愛情であらうか。生は暫く新約コリント前書第十三章の中より次の數節を拔萃してみやう。

愛は寛忍をなし又人の益を圖るなり。愛は妬まず誇らず驕傲ず非禮を行はず、己の利を求めず輕々しく怒らず。人の惡を念はず不義を喜はず眞理を喜び、凡の事包み、凡のこと信じ、凡の事望み、凡の事忍なり。

「愛は寛忍をなし又能く人の益を圖る」之れ愛の愛たる所以、自己をのみ標準とし我をのみ貫かむとする主我一方の人に取りては確かに頂門の一針一大の難行であらう。無我の愛――我を忘れて人を愛し人の益を圖る――之が眞の愛情なるものではあるまいか。否之れこそ眞に自己を愛する所以ではあるまいか。

嘗てアルプスの山中、雪の爲め殆ど昏睡せんとした一旅客か、同じく雪中に埋れた一旅人を助けいたわり、爲に我れ知らず氣力と體温とを恢復して、數時の後には共に共に手を携へて山路の旅を急いだと云ふ物語は、「人の益を圖る」ことと其れ自身が畢竟するに眞に自己を愛すると云ふ好適例ではあるまいか。

けれども之のみを以て愛の完美を求むることは出來ぬ。之れ以上なほ「愛は妬まず誇らず誇傲ず非禮を行はぬ」と云ふことが肝要である。此の境致まで進まなければ愛も眞に至醇至高のものと云ふことは出來ぬ「可愛さ餘つて惡さ百倍」とは古諺氏が能く世俗的人情を觀破した名句である。世俗の總ては之である。自己の意に從ひ自己の支配内にある間は極度の愛を以て接した男女夫婦も、一度怒濤狂ひ慘風吹きすさむに於ては、前の可愛さは極度の反動として此處に濃厚な惡しみとなつて表現される、然も之れ眞に愛する人々に對する態度であらうか。心よりして其の人を愛する所以であらうか。生は嫉妬を以て愛の反面を見る説に對しては全然同意を捧

ぐることは出來ぬ。況や愛するものに對して自己の意志に反せりとの故を以て擅に非禮を加ふることをや、此等は以ての外のことである。愛の何物たるかを知らない者である。愛の問題に關知するの資格なきものである。

然らば至醇の愛とは如何なものであるか、別に我等が彼是云々する迄のこともあるまい。哥林多前書の十三章に云へるが如く、唯一意愛する人の爲に自己全身の熱血を以て常に幸福の糧を與ふる。此處に眞の愛情が發現せられるのではあるまいか。如何なる時、如何なる場合——縦令愛する者が我に反亂を企て、自己の手中を離れ去るとも——決して自己至醇の愛情を變へぬ。常に彼が幸福を祈り平安を求むる。之が我等の最も望ましい美しいと思ふ至醇至高の愛情なのである。

慈善家は何も自己の名前を表さなくとも宜い。只當の人——男女に限らず——其が不幸可憐の境遇より救ひ出されて幸福でありさへすれば其れで結構なのだ。必ずしも何の某など堂々と記名調印する必要もあるまい。愛も左様である。可憐不遇の男女、乃至は眞に心を許す友の間に何も規則喧しい名前などの必要はあるまい。唯全心全意を込めて愛する人の利益を圖る。それで最う結構なのだ。贈答の物品などは如何でも宜しい——唯其間一點の汚穢さへなくば利慾の塵さへなくば其れでもう澤山だ。否之れこそ眞に淸らかな美しい至高至醇の愛情ではあるまいか。

亞米利加第一の大統領ヲシントンは壯年時代に心より愛して居た一人の婦人があつた。が不幸にも其婦人は、

**あれ程高潔な聰明なワシントンに向て全身の愛情を捧へるには餘りに冷かであつた。斯くて年は立ち星は移り**

婦人は他家に嫁し、ヲシントンは過刻なる英吉利の苛政に耐へて奮然獨立の義軍を起し、自ら統帥者の一人となつた。其後幾何もなく一人の美しい青年がヲシントンの配下に屬してきた。彼は思ひ出すだに血潮湧き



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

立つ戀人の愛兒であることを知つたので、宛然我が兒の如く愛撫したさうである。自己に叛いて他家に嫁いた婦人に對して、一切の私情を抛ち咽怨の塵を掃つて往時に變らぬ極美の愛情を以て己が戀人の一兒に移したヲシントンの心情は何と貴い美しいものではあるまいか。吾人は此の活ける愛の教訓を提供したヲシントンに向て深く衷情感謝の誠意を表さなければならぬ。

吾人の所謂至醇の愛、至高の愛なるものは亞米利加初期の大統領チョルヂ、ヲシントンに依りて遺憾なく發揮せられたのである。此の他なほアーヴキングのスケッチブックの中には此の種の理想的愛情なるものが遺憾なく發現せられて居ると思ふ。特に彼のブロークンハートの中に現はされて居る可憐純美の一少女――よし其が肉體は他人の家に托しても靈は矢張り斷頭臺上の露と消へた然る一青年の傍を離れず、遂には日々瘠せ衰へ行く靈と共に、同じ冥土に一青年の跡を追ふた――彼の一少女が生々しき極度の愛情は何と美しいものではあるまいか。

我等は尚ほ此の種の適例を數限りなく掲ぐることが出來やうと思ふ。然し今は其の隙を有たぬ。唯生が所謂至醇至高の愛情なるものが、必ずしも一時の空理空論として根據のない架空的思想に非ざることを承知して貰へば我が希望の一部は其れで足りるのである。

（十月四日友愛學舍に於て……櫻　齋生）

# 恐怖の實驗

大坪秋人

或夜のことであつた、余は實に不可議なる神秘的恐怖に襲はれた。どう考へてみても普通の恐怖と違つて自分にも不思議に堪えられないから、其實驗の面影を筆にしたいと思つて苦心したが明確に其全體を描き出すのは到底不可能のことであつた。けれども其の出來得る限りを寫したのが拾はれてこゝに掲ぐることゝなつたので、せめては同じ心證の友もあらば同じ心の響に欣喜の琴音を分ちたいと思ふのである。

其の夜はもはや九時頃であつたから勿論人の氣も靜まつてる頃である。窓を押せば燦然たる星の光が輝いて居るので何氣なく仰いて星の光に見入つたのであるが、別に星の光に思を馳せて美しい感想に耽りたいなどの心が起つたのでもなく、また敢て哲學的瞑想に耽つて見たいなどの考になつたのでもなかつた、たゞ何氣なく星の光を見入るのであつたが、固より廣からぬ窓なれば只天の一方のみを眺め得るのみて、美的感想など惹き起さしむべき場合でもなく、また、どんな憶病者でも、そんなに恐ろしきところでもなかつたが、不思議にも星の光が異様に輝いたと思ふまに、天の奥底が見え透いたやうになつて、たゞ深く〳〵奥へ〳〵と天地の奥底が擴大して行くのであつた。

最早星の光などは眼中にない、而して此の天地は恐るべき一個の大なる無限の而かも索漠たる團塊と化し去つてしまつたのである。此の時の恐ろしさと言つたら、とても筆や言葉などにては形容の出來ない、實に何とも言はれない一種の大恐怖に襲はれて居たのであろう。其の自分は自我の觀念などは一切失つて居たらしい。此の今迄の天地は無限索漠の一大團塊でそこには恐怖戰慄などの言葉にては到底盡されない、一種嚴格な、而かも遁るべからざる或者に占領せられて居るやうしてあつた。

ふと刹那は一轉して此の索漠たる宇宙に恐れ戰ける吾は自己そのものに恐ろしくなつて來た。この索漠た

る一大團塊たる宇宙に存在せる自己そのものが恐ろしい、この自己存在の恐怖は索漠たる天地存在の疑團と共にすさまじく襲來するのである。「自分は何故に存在するのであろう、また如何にして存在するものであろう」などの疑問がすさまじく湧いて來る。而しながら自分てこんな疑問を起して自問自答したと言ふのではない、否、此の時の自分にはかゝる疑問など起すべき餘裕はなかつたのである。たゞ疑團に伴ふ恐怖が天地の奥底よりすさまじく湧き出てゝ吾が頭上より全身へかけて骨も碎けよとばかりに壓し來つたやうな感がしたのである。

ふと吾は我にかへつた。夢か現か今の有樣は倘目を離れぬ。恐怖は依然として去らぬ。卑怯のやうだが自分は恐ろしさに其場を逃げ去つたのであつた。此の間の時間は固より知る由もないが四五分間位は連續したらしく思はれる。吾は確かに天地の實在と自己存在とに對して懷疑驚異して居たのであろう。而かも自らなせるものでなく一種の超自然的なる不可思議力に囚はれて居たのではあるまいか。

吾は覺めての後、否吾にかつた後も更に考へざるを得なかつた、悶えざるを得なかつたのである。吾は初め病的の現象ではないかとも思つたが病的としてはあまりに嚴肅て、あまりに沈痛て、あまりに深奥て、あまりに神秘的であるやうに思はれる。と言つて吾はこんなことを人に誇張するのではない、只だ吾は不思議にして是迄自分に經由したことのない恐ろしい實驗を確實に自己に證したと言ふに過ぎないのであるが、吾は更に悶えざるを得なかつた。自分はかゝる索漠たる宇宙に倘ほ大疑團と大恐怖とを抱いて生存せねばならぬか余は終生かゝる懷疑の中に在ることは斷じて出來ない。人は限りなき恩愛の御神を打ち仰ぐとぞ言ふ、吾も亦日夕の祈禱に恩愛の御神に吾が誠心を捧げること幾そ度てあろう。而かも御神は恩愛の御手をそと後ろに引きたまひて吾には斯かる懷疑と恐怖と索漠とを與へたまふたのであつた、吾は悶へざるを得ない、吾は何時までも之の現在の我に留つて斯かる恐怖と懷疑

の内に在るに堪えない。然れども亦た曩日の無意味なる生涯に立ち返ることは斷じて欲しない。吾れ聞く宗敎的生涯の始終を徹して多くの神秘的驚異が現はれると。吾は是迄の如く何事も善い加減に濟まして置くのではなく、更に深い〳〵心性の要求が何物かを求めずは止まざるが如き心の狀態に立ち至つたことを感謝するのである。これが吾が恐怖の實驗によりて得たる唯一の賜であろう。

## ブラウニングの「サウロ」を讀む

女子英學塾講師　河井道子

一體ブラウニングの詩は大變に六ヶ敷いので、外國人の中でも隨分難解のものと考へられて居る。實際或る一詩の如きは十年間も放棄せられて居たといふ程で、私などには能くは分解りませぬ。「サウロ」の如きも元より皆は分解りませぬが其の思想の幾分にても御紹介することが出來たなら私は其れて法外の喜びと存じます。

テニスンやロングフエローなどは左程六ヶ敷なくて宜いと思ふがブラウニングを讀む位になるもの亦一種の喜び樂しみでありましよう。

一體此の詩篇に限らず、ブラウニングの作詩の上には能く愛の閃きを認めます。否、彼自身が既に愛を說いた人である。蟲を見ても鳥を見ても、或は又友人男女の間でも神人の關係でも皆此の愛を以て一貫して居るのであります、知と愛との二が共に相合體する時に人は神らしくなる。元より知はつまらない。宗敎とは緣が遠い。けれども知と道德と愛とが伴つたもの、之が人をして神らしきものと爲すとすれば、動物と人とは如何なる部分に於て異つて居るか。答は極めて簡單である。人は一種の深みを有つて居る。即ち神の聖き愛を感受する力を有つて居るとが一つ。それと人は勿論完全なものではない。完全ならざるが故に人と神とは全く別種のものである。だから人間には希望をいふものがある。進歩がある。之と同時に人は不完全なるが

故に自然と失錯をし缺點を暴露する。けれどもブラウニングに取ては此の缺點なるものが大なる光榮であり奬勵者である。人は起き上る爲に轉ぶ。斯くて私等は漸次に進み進みて終には神を土臺とした境涯に到着するのであります。

ブラウニングの詩は始より終まで自己を一個の勇士として何處までも奮鬪的に描き出して居る。必ずしも勝利を得るとは申しませぬ。失敗は失敗として尊重する。所詮彼には失望といふものは、全然皆無であります。彼は前にも申し上げた通り起上る爲に轉び、能く戰はむが爲に失敗する。憺かに之れ麗はしき神を土臺とせるものである。神なくむば一時的浮華的で決して賴むには足りない。以上の事實を前提として「サウロ」の一篇は成り立つて居るのであります。

詩の序幕は「サウロ」が今し苦しみ苦しむで、食事は喰べず、夜は眠らず、唯屹然として陣中に立ち悶えて居る、臣下呼べとも應せず、生死の程も疑はしいといふ有樣。此の時臣下の一人がダビデに會つて如何にも顔容神々しく誰がみても露おきあまる雄々しい姿であるといふ。斯くて崇美の一少年ダビデは臣下の一人に奬められてサウロの陣營近くにやつてきた。が今迄暗跡を深く通り拔けてきたので何が何やらさつぱり分解らぬ。唯暗黑の裡に黑いものが居る。天幕の眞中に棒がある。捧に倚つて「サウロ」よ僕が只今推參致しましたと挨拶をする。後は歌になつて牧羊者の單純な優しい響が鳴り渡る。琴をとつて強い調子を彈する。誠に面白さうである。

第二のものが即ち人間に對する歌、之に附加して鳥の歌を歌ひ、かゝる鳥獸生物に至るまで等しく愛と望とが滿ち〳〵て我等人類をしてワン、フアミリーに居ることを自覺せしむることなどをほのめかす。此等の樂音を聞かされた「サウロ」は幾分か身體を動かした。然もなほ一語をも發はぬ。

人は生存して居る。が嬉しことが矢張誰にも嬉しく思はれるに違いありませぬ。けれども世を樂しみ讚美して居ることも神が中心でなくてはならぬ。私達が喜



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

で風光に接したときと、銀行員や商店の人などかすることゝは同一なとても多大の相違がある。例へば犬吠崎のほとり、太平洋の波が砕けて月光中空にかゝり静寂の氣四邊を包むで云ふべからざる妙味がある。一種深刻な平和があるやうに思はれる。が銀行員や商店員などのやることをみると、室を閉ちて歌ひ騒ぐ。等しく喜び樂しむでも天然を友とせず、自然の風光を眺めず、彼等自身は之でも尙生きる甲斐があると思つて居るでしようが、私は彼等が一時の苦痛を遁れる爲にわざ〳〵此の地を撰だてはあるまいかと思つて居る。彼の友は幾人か涙を流したかもしらぬ、妻や子供が此の明月の夜半に泣いて居るのかも知れぬ。苦しみを隱し苦悶を濁して眞の樂が得られるでありましようか。水を飲み石を枕にしても衷心の淸く澄み渡つた人の方がより多く幸福な人ではありますまいか。

斯くてダビデは誠心こめて王を勵ました。陛下は万乘の君に在す。之が爲に何故喜び給はざるや。之れ確に神の愛である。思ふて此に至れば誰か元氣を恢復しないてありましよう。我等は深く之を信じ之を奉じて居ります………見るまに「サウロ」の容子は變つてきた。沈み返つて居た王冠は赫燿の光明を點した。態度が何となく和らぎくつろいで失望の雲は何處ともなく消へ散して終つた。然し未だ王には希望と云ふものがない。縱令失望苦悶の境涯より救ひ出しても、尙眞の希望を與ふるとを怠つたならば未だ救世の大業を完ふしたものとは云へない。此の場合に臨てダビデは何をしたか。力と賴むは唯一個の琴あるのみ。彼は牧羊者たる一兒少年の、救はるべき當のものは堂々たる一國の君王である。あゝ彼れダビデは何にして救世の大業を果さんと試みたか。彼は大地に跪いた。跪座して心からなる祈りをあげた。本文では此の祈禱が歌になつて居る。妙味は深いだけに至極難解の部分に這入つて居る。少くとも三度位は讀まなければ分解りますまい。といふは「サウロ」の言辭と祈禱の言とが互に相縫ひ合つて一寸何れとも判斷のつかないとが多い。

ダビデは斯くて祈つた。が然しあなたの御力に依て

外國を征服し得るやうにとは云はなかつた。なぜならば「サウロ」は今外征に失敗して苦悶して居るのである。ダビデは一切肉のとは云はなかつた。靈と直接に話しかけたのである。惡は或る場合に於て改善することが出來る。失敗は時に勝利の先驅たることが出來る………一度惡を行へは自ら深く前非を悔いて悔ひ改める。之が宜いと思つても誰かに氣力を與へてそれて亦他の惡を産むで百千倍したる罪過を生することが一番に苦しい。神に賴るべきである。神に自心を打明くべきである。汝の意思、同情愛などて以ていへはどれ程勇氣を付けられ力を與へられたてあらう。神は汝を主として大なる威力を與へ給ふた。大なる力を與へむ爲の主てある。御身は此の大恩に向て衷心神に感謝しなければばらぬ………剎那に今迄死者の如く身動きもしなかつた「サウロ」は思はずダビデの傍近く步ひて來て一心に凝視した。ダビデの顏容は美しい。立派てある。力に充ち滿ちて居る。

謂ふ迄もなくサウロと一牧羊者の子ダビデとは天地雲泥の相違がある。然も今や相接して胸と胸とは合一せんとして居る。誠の力は偉大なるものである。一度其が人間深奥の琴糸にふれると口と口との話ではなく靈と靈との話となる。人間と云ふ感情などは露程もなくなつてくる。ダビデは今樂器――琴――などは何處に打ちやつたのやら分解(わか)らなくなつてしまつた。

總じて神の御胸より流れ來る愛は一種の律(おきて)である。否愛なるものが先づ第一に働いて律を作る。私は心より人を愛することが出來る。之れ神の下し給ひし深き御恵てある。我等は元より不完全なものに相違ない。殊に完全な神と比較したならばいふにもたらぬものである。然し私は汝を愛することが出來る。我を造り給ひし神は純にして純なる愛てある。されば我等の神は我等よりは幾倍深き御心を以て愛し給ふかわからぬ。汝は其の愛の神を見ねばならぬ………ダビデは秀麗花粉の居を開いて斯樣(かやう)に言つた。之よりして化身(インカーネーション)と云ふことが出來るのである。神が人間となつて此の世に現し給ふたのである。我等が有する麗はしい所が

即ち神の幾分を反射したものであらう。エスキリストは神の現身である。エスの分解らない所は吾等が反射して之を示現せねばならぬ。……(中略)………私は如何して家を作つたのかは知らぬが其の間云ふべからざる平和があつた。兎に角何か一つ出來上つたときに我等の心には大なる喜悦がある。然も其處に平和がなかつたならば其の喜びは餘りに嬉しかつた爲に却て永續性を失くしてしまふ。ダビデは祈禱に依て平和を得歡喜を得遂に久遠の喜悦を與へたのである。かくて奇麗な花は一倍の美を輝かしてきた。鳥獸蟲魚も一段と靜かにみえた。何故であらう。新しき律を感じたからである。然れば其の新らしき律とは何であるか。云ふまでもなく至高の愛である。至醇の愛情である……かくて「サウロ」一篇の詩は完結せられて居るのである。

私は此の一篇を通じて大に學ぶべき敎訓は祈禱であらうと思ひます。人が相談をしたいのは矢張り人間である。助けのないのも亦人間である。友を有てる年長けた人も等しく神の救を求める。けれども祈禱の精神ダビデの力、熱心に乞ひ求める精神が波動して遂に神に達する。神に受納せらるゝと信じます。

「サウロ」の一篇を讀で私が感じた今一ッ二ッを云つてみれば概してブラウニングの詩を讀む時には不可解の念慮が伴つてくる。彼は又神を以て自然と云つた愛は其の中心である。キーノートである。愛は元來神のものである。神の胸より流れ來るものであるから非常に强い。世界は又强いものであるが我等は此の世界よりして脱却することは出來ぬ。正義は常に愛より來る愛は强い。愛の前には苦痛災厄の魔軍も殆ど何等の力をも有たぬ。

以上は私が「サウロ」を讀だ所感の大要である。が此の詩は讀でも讀でも飽きることのない佳作で、單に英詩として見るのみならず、宗敎詩としても誠に立派なものであります。兎に角私共は人間として非常なる元氣を有て行くことが必要であらうと思ふ。私は此の麗はしい一詩人を人界の中に下し給ふたことを深く神に謝するものである。(文責在記者)



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

# ●憐れなる母子

世には色々と不幸な人もあり憐れむべき事情も澤山に生じて参りますが、年猶ほ若き婦人が他依るべき良人に捨てられ、母に別れ父と隔たりて孤獨衰殘の境遇にあるとしたらば如何でありましよう。私共は此の種の人を最も不幸な可憐な人として出來得る限りの便宜と同情とを與へてやりたいと存じます。

私は嘗て母子四人の者が此の世の苦鬪に耐へず最愛の兒が生來の不具者で世の人並に活動も出來ぬと云ふ所からして、遂に相携へて海に沒じて死を圖た悲慘な物語を聞きましたが、世に何物か幼兒ほど可愛うて母の心を痛ましむるものがありましようか。兒は母其れ自身である。否自己以上の高い貴い愛の化身でありましよう。

此處に御紹介しやうとする憐れなる母子は、まだ年少な至て可弱い、未經驗な婦人であります。年令は左樣、二十三四でもありましようか。父に別れ母に死別の涙を灑いて、生命と頼む良人には捨てられ、みすぼらしい長屋の一室可憐な幼兒を唯一の希望として其の日を送つて居るのであります。私は此の日曜に小日向臺の教會で服部牧師立會の上、一應此の憐れな母子の身の上話しを聞きとりました。

婦人の生國は青森の一小村、久しく九州の若松に居られたさうですが、當時一漁村に過ぎなかつた若松は、まだ高等女學校の設けもなし、小倉まで通學するのが不便な爲に他の裁縫學校位に通學して三四年前さる會社員の所に嫁かれたさうであります。其の後、炭鑛事業に失敗した父は遠く北海の邊地に彷徨ひ久しく音信がないとのこと、それに力と頼む良人には見捨てられて、今では先き申し述べた小日向近くのさる長屋に僅かな小道具や衣類を守り、今歳三つになる可愛しい一人の男の子を樂しみとして細い烟を立てゝ居るさうであります。

私は嘗て親しく往來して居た前記可憐な親子四人の悲慘な回想が此の刹那烈しく我胸を責て耐え切れない

程苦うなりましたので、及ばすなから此の可憐な母子二人を慰めてやりたいと思つて今朝しも小日向の教會に始めて足を運び入れたのであります。

勿論私が如何に彼の女の上に同情を有つて居りますと申しましても、微力到底彼等母子の窮境を救ひ出すことは出來ませぬ。たゞ醇平の愛を以て世道人心を感化し薫化しやうとする女子青年會の會員諸姉に訴へ、皆樣の御同情を仰いてみだいと思つて此に紹介の筆を採たわけてあります。

彼の女は目下大可愛い一人の男の子を生命(いのち)とも希望(のぞみ)とも思つて居るのですから、母子を離隔せしむることは到底不可能のことであります。然し相當の教育はあり品格もある温柔の婦人てすから何か寄宿舍みたいな集合所の雜務位には充分働けやうと思ひます。讀者の中もし此の憐れな年若い母子の爲に一掬の同情を灑いて下さる人があつたなら私が希望の一念は貫成せられたのてあります。彼の女は未だキリストイエスを知らない可憐のものてあります。然し毎日曜、小日向臺の教會に出席して牧師のお說教を聽て居りますから月と共に衷心の慰籍も得られることと存じます。)あゝ世に憐れなものは多い。苦しいものも少くはありますまい。けれども良人に捨てられ母に死別(しにわか)れ、父に離れたる身の如何に辛(つ)らいてしよう。如何に物悲しいてありましやうか。私共は親に別れたゞけても雨の夕すゞろ懷郷の涙が露(こぼ)れるてはありませぬか。あゝ良人に捨てられ母に永遠の袂別(わかれ)を告げた可憐の母子は如何に苦しいてしやう。悲しいてしやう。私は同情の涙を以て拙き此の一文を草(つゞ)りました。どうぞ仁悲なる諸姉の御一讀を願つて置きます。(十月十二日安息日の午後一記者)

## 前號所載 植村先生の「宗教の撰擇」を讀みて

木山一夢

軍隊の醫務室に裹者治療の間々に暇をぬすみて認めましたので粗雜の點は豫め御許しを願ひます。

基督教主義を標榜せる本誌に於て私の佛教的信念の

概略を開陳するの榮を得ましたのは、是れ全く大慈父の妙なる御催しとして、只管感謝の念に堪へませぬ。

植村先生は、當今基督教界に於ける最も眞摯なる傳導師として、尊敬を拂はれてある御方であり、又私共所謂基督教部門外の者も、竊かに其の聲名に浴して、嚴たるその信念、温和なるその容貌をもて基督教界に活躍爲し給へる御樣子を、尊く又心强く拜見して居ります。妙なものです、今日のやうに、上中下皆人が、口に文明といひ、開化と呼び、道念の何たるを想はず、人生所生の因緣をもて、好ましからぬ己のが慾望の滿足をもて、此世隨一の事となし、精神的の根本信念の上に、如何に豁かなる無限の妙味あることを認められない時代に於ては、私は其の間は基督教に屬せずと雖も、活きたる宗教といふ大きなもの丶上からして、先生の如き眞摯なる宗教家の在ますを、何よりの心强さとして居ります。私の早稻田在學中も、私の學友で先生の感化を受けた人が偉大なので、私も自ら、先生の教會に身を運むで、說教を傾聽したこともござります

櫻喬兄とも屢々語る通り、今日の時代に精神的に極めて憐むべきものが最も多數を占めつ丶あるから、吾々は宗教上の爭ひは好まぬ、又宗教上の爭ひは多く宗教それ自身の生命以外の自我といふ色眼鏡によつて、起こる爭ひが、殆どその全部を占めて居て、勿論自分が最も長く關係して居る、最も因緣の深い宗教が、是れ唯一の眞理なりとするに至るのは、無理もないこと、又自分の辿れる宗教ならば、自分の全心全力を傾倒して己のが感情智識の滿足を得、一擧手一投足の上にも矛盾なき觀念を得るに至るまでは、進まなければならぬ。宗教は他人の爲めや、又國家的觀念を養ふ爲めの手段としてあるのではない、自分と最も親近な、否な親近ぐらゐてはまどろつこい、宗教の生命そのものが己れの生命となり、一微動一呼吸そのものが、己のが信ぜる宗教の生命（ライフ）として考へらる丶に至らずは自己中心の滿足は出來ない。人生に對する聊かも不安の霞（かすみ）一塊りだも、己のが信仰によつて解決することの出來な



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かつたならば、そはまだその人は眞の宗教の生命に觸れて居ないといはねばならぬ。それは、基督教であらうとも、佛教であらうとも又何れの宗教であらうとも、同樣である、人間の心根、心情のはたらきは、其の外貌及び境遇に依て異つて現はれて居るやうに見えても、中心を披攊して打明かし合つて見れば、必らず自分の豫想以外に、心裏相融合する心臟の共鳴を感ずるのである、四海同胞だとか、萬人是れ佛子神子といふの觀念は、決して國家的の小さな區劃の内にくゝられたる、有限性のものではない。只各人の間に、さま〳〵の自我といふ色合ひがあつて、其の本來の共有性を陰匿して居るのだとおもはれる。

四面寂として萬物眠れる深沈の宵、三更中空にかゝる孤月に對して、面てを注いだ時、誰かは無限の感慨に咽ばぬものがあらうか。十年强窃盜を働きつめて居る無賴漢も、秋の孤月に對しては、覺えず戰慄恐惶して、良心の囁きに出會することが間々あるそうてはないか、三十年間殺人强盜を働いて居た男が、北海道の獄に繋がれた夜、無性に眠入つたさうだが、彼曰く「今夜ほど安心してゆるりと眠つたことはない」云々と味ふべき語ではありませぬか。

如何なる惡業人と呼ばるゝ人の心も、其の奥底は玲瓏玉なす光りを共有して居る、只其の境遇に依て、各人相反するの行いをも爲して居るのだと思はるゝ、歡喜の歌も悲哀の聲も、共に其の境遇に依て發する自然の聲である、其の心の奥底が已に一ならば、人間の自然至情から逆り出でたる讃仰歡喜の宗教の妙味は一でなくてはならぬ、吾々は世の多くの論者の如く、宗教を以て倫理道德の實踐を目的とする、一個の假設的方便だとは考ふることは出來ない。

道德は道德であり、宗教は宗教である、宗教の爲めの道德でもなければ道德の爲めの宗教でもない。けれども道德的自覺が宗教に突入し、又宗教的自覺が道德に躍動し來ることは、爭はれない事實である。宗教的信念に這入る爲めに、道德的實踐が要求せらるゝ宗教も澤山ある。之れは有情の機類が千差萬別であるから



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

生じ來るところの類別てはあるが、道德的實踐が必らずしも宗教的信念に入るべき必須の條件ではない、無慚、無愧、放逸、無頼の惡業人があゝ機緣にふれて、吾れ知らざりし久遠の昔より、吾れを攝取し、吾れを撫育し下されつる佛無盖の大悲に、心眼開發した時は、そこに溢れ出づる歡喜泣血の思ひは、やがてこれ自然法爾無我純潔の道德美として活躍し來る時てある。無慚、無愧 放逸、無頼といふ、實は是れ他人ならぬ私の實際であつて、如何に道德的理想の美は美しく、高く、清らかてあらうとも、靜思熟慮して、つく〲自己の身、口、意、三業の所業を省みて見れば、吾人は慚愧反省などと、口にし筆にし、且つ心に思ひ浮べてはゐるものゝ、實は怖ろしき無慚、無愧、放逸、無頼の、實に何ともいひ様のない、淺間しき〲現實態にあるもので、佛の威大なる攝取不捨の光益に氣がつくたびに、そのはてしなき無慚無愧の夢を覺醒さしていたゞくのてあります。吾々は口に、筆に、立派な事を言ひ、且つ書き現はしてはゐるものゝ、よく〲考へて見れば、或は自己小學識、小智能の霞のやうな影にかくれて、立派な事と云爲行動して居るのです。私は今哲學的、又文學的などといふ、凡夫同志の理窟の界からかけ離れたる、軍隊に在りて、人生なるものゝ或る一方の實眞味を甞めつゝあるのでありますが、考へて見れば見るほど、學者宗教家といはるゝ立派な人ほど、自己を欺き、人を僞れる者はないのではあるまいかとつく〲考へて、自ら汗を握る事のみ度々でございます。噫憐むべき者は、自分以外に存在するものではなくて、自分こそ、最も小さな、最も淺間しき動物であるやうに思ひます。しかし此の極少極微の私が、どうして、又如何なる機みで他力本願の佛智佛悲に遭遇して、佛の威大なる御力を喜ばしていたゞくやうになつたかと想へば、親鸞上人が渇仰慶喜の餘りに、一乘究竟の極說遇いがたくして今已でに遭ふ事を得たり、といはれ、――嗚呼弘誓の强緣は多生にも遭ひがたく眞實の淨信は億劫にも得がたし、偶々淨信を得ば遠く宿緣を喜ぶべし――といはれたのも、此の蟲のや

うな自分が、そのまゝに救はるゝ佛の大慈悲に氣がついて、信念の光りに胸躍り、心血湧き出てし時の、歡喜の言葉では、あるまいか。學者智者の信念も、愚者劣者の信念も共に是れ唯一であるといはるゝのも、此の他力本願の妙味を、實感實當せられたところの言葉ではあるまいか、と考へてゐます。植村先生が——

基督敎にあつては、神は常に我等の祈を聞き、我等を愛し、同情の熱を以て切りに我等を呼びさまし給ふのである、佛敎に於ては此の愛情がない。人が苦み惱み悲しみ憂ふることがあると、此等一切を煩悶と呼び、此等の苦痛より脱却せしめんとする。之が所謂佛の救てある云々。又その救はるゝ方法に就てみても、非常な相違がある、基督敎では、我を愛し給ふ神樣の中に自己を潛めて一切を委ね信頼する、此に始めて救の道が横つて居るのである　即ち神樣の中にかくれるのだが佛敎に於てはさうはか行ぬ、自分で自己の理想を完成する此處に佛敎本來の救があるのだ云々——と云はるゝのは、失禮ではあるが、佛敎を味はない、遠く離れて、初めから基督敎に腰を据へての、批評的の態度に眺められたる言葉ではあるまいかとおもはれます。私は基督敎がどうの、佛敎がどうのといふ比較論よりも二つの宗敎が指し示す絶功唯一の眞理に向つて、直摯邁進して、其の唯一なる絶對無碍の眞味を甞めて、一日も早く、さまよひ悶ゐつる我が同胞の心靈に、復活の曙光を注ぎたいものだとおもふて居ります。私は學問的に、又理論的に先生の御説に對して、批評的に彼是れ申すのではありませぬ。前にも申しました通り人間の姿はかわり、心のさまは異つて見えても、人間の急所奥底を摑み出して披攊して見れば、誰れの心も血の出ることとは嫌いな、唯一同感のものであらうとおもひますゆへ、自我の色彩で自己を欺かぬ限りは、中心自然の要求たる宗敎の信念そのものは唯一でなくてはならぬと確信して居ります。佛敎信者の基督信者に望ましく思へる信仰の實感は恰かも植村先生の述べられた意味と合致する點が多いのです。即ち雑行雑修自己の小善根、小功德に信頼せす、他力本願の偉大なる



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

救濟に凡てを擧げて乘托する、そこに佛と我れとは母子の温かき感情に融和せらるゝ、「子の母を懷ふがごとくにて衆人佛を念ず」といふ温かい味ひは至心、信樂欲生といふ三心の說方が純佛敎の眞生命こゝに在りと唱道せる、淨土眞宗存否の致命傷とまでなつて居るので、古來眞宗敎史に於て血を流すくらゐの奮爭が起つて居るのも、唯此の信仰の純他力と半他力との判別であつて、眞宗平素の說敎が常にこゝに在ることを思ふて見たら、思ひ半ばに過ぐることとてあらうと思ひます。先生は基督敎界に於ける最も眞摯の御方、敎の爲めに全身を投して御いてになる御方と尊信して居ます。同樣に世の所謂自我の色彩によりて、自己を僞れる第二義的の議論でない、眞心を打ち出しての相談には、必らず同情同感の想ひを浮べて下さることゝ信じます。返す〲も私の上來述べ來れるさまの信念の實狀は、學理的に先生の御說を批評せんとする、そんな人生の根底に接觸せない浮いた考えから申し立てたのではありませぬ。凡てを洗ひさらけたる純潔無垢の信念は、實はこれ、佛敎の感化によれる我が亡慈母の片影そのまゝでありまして、何等の學理的潤飾を加へたのではありませぬ。實は、昨年已に故人の數に入りました我が慈母は、元來、眞宗の家庭に育ちたる身の上で、私の乳兒時代から小學中學の時代に至るまで、母の心に浮べる信念の餘光を以て、私を養育し敎導して下されたので、私も御蔭を以て、宗敎的品性を養成することが出來ましたものゝ、種々と浮世の智識を得るに至りまして、靑年にあり勝ちな心に導かれて、隨分宗敎を離れ宗敎の尊嚴を無視した時代もあり、全く懷疑の谷開深く沈輪した時代も、彼れ是れ數年に渡りましたが、最暗黑の谷間を辿り〲ながらも、私の心の奧底の要求は、やはり温かい慈愛の信念で、忘るゝことの出來ない懷かしい一道の光明は、懷疑の苦しき心根のそのまゝに、恰かも大浪の荒磯に浮ぶ小波の上に映れる月影の微光の如く、このしぶとき私を、遂に今日の境遇に導いて下されましたが、懷疑とか研究とかは私が信念に入るべき是非とも通過せなければならぬ

經路であつたと見えまして、今では何事も〳〵佛の意義深き導きとして感謝に堪へない次第でござります。然れども、さまよひ〳〵六道の界を經回ぐり來て、今初めて永劫久遠の夢を覺ましていたゞいて、見ますれば、慈母の信念そのまゝが、かくと昨今に於て覺らるゝ實狀でござります。母は一生働きづめて、昨年遂に亡くなりました。母は私にとりての久遠の母であつて又大悲の佛の深い惠みの御遣はしとして、日々渇仰の中心となつて居ります。母の信念が純たる佛教(眞宗)の信念だとしますれば、私はまだ母の心に映じたる佛の大悲の全分は覺ることは出來ませぬが、母の死後、折にふれ節にふれ、幼き時分から母に與へられた自然の感化そのものが、如何に深き根底を備へて居るかを想ひ到らぬことはござりませぬ。佛教の感化の偉大であるといふことは、我が慈母の言行を、以て、推することが出來る、從つて自分の歡喜から湧き出づる考へが、上に述べ來れる大要でありまして、迚も充分思ひのまゝを打明かすことは出來ませぬ。

尊き先生の御說に對し殊に基督教主義の本誌に於てかゝることを申連ねましたのは實に失禮千萬ではござりますが、佛教徒の心の底からの有りのまゝを御推し下されて、一層深き信念の眞味を御含味下さらば、此上なき幸と思ひます。猶ほ佛教信念の妙味に就て申述べ御參考の資料にもと思ひますが、復たの御緣を樂みに、心に浮び行くまゝを筆にして、御覽に供しました次第でござります。先生の此度の一文、殊に難有く、大悲のみ親の御恩がしみ〴〵と感じられまして、實に不可思議の念に、覺えず佛名が口をついて迸りました。

(十月五日聯隊治療室の一隅に於て)

## 水の精(第六回)

英學塾講師　辻村靖子

偖は非常に疲勞れてをるので、例の慈悲深い老夫婦に、是非二三日の逗留して、ゆつくりと氣力を回復し



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て天候を見定めてからおかへりなさいと、懇に勸めるのです僧もとつをいつ考へるのですが、かへらうにもかへられません。未た何時はれるか分らぬ空合で、遠山も森林も、湖水も一刷毛に薄墨でかきけしたやうになつて降りそゝぐ、軒の玉水はまるで天の川の樋口をきつて落したかと思ふほと、どうどつと降りつゞくのです。橋梁は落ちる、舟檝はでぬ、戸外へ面もだせぬほど降りに降りしきる强い白雨です。

老爺さんと老媼さんとは、向つてこそまた云はねいつそやから、折があつたら云憎くゝも、口をきつて、此氣にかゝる可愛い少女の、夫定めをしてしまいたい。もう自分たちの生先もなし、此又あらしか續くたんびに、湖水の水かさは自然まして、結局はまことの離小島、そう成つた曉には、可愛そうに彼女めも、誰を便りにして送るやら、こんな考へがふとでると、もう矢もたてもたまらなくなつたのです。幸に彼の御出家を立合人にお賴みをして、とに角式だけを擧げてしまひたい。と一人で決定て、やりて足下から鳥のたつやうに、一人々々を手わけをして、哀願ふやら說き諭すやら、二人ともしつかりと返答もせぬのですが、そぶりをみると別に不服はないやうです。否郞の方は初から非常に懇望して居たのですもの、何の不服なことがありましやう。少女にさへ二心がなければ、式をあげてからすぐに都へ連かへつて、誰にもかにも紹介はせて立派に披露の宴をやつて、人の羨む名望を、必ず彼女に與へやうと、心にかたく契ふたのです。そこでその旅僧にも、衷心のうちをすつかりはなしてなるならば此結婚式の、立合人になつて吳とたのみますと、之も少からず喜悅んで、吳れて、世捨人の身を厭はれずはと快く承諾したのです。

て此質素な神聖な式がめでたく擧行られて、かた計りの三方島臺老爺さん老媼さんが、すぐ其まゝの尉と媼で、高砂をうたひ納めてからあとは、五人が打くつろいで酒宴となりました。僧は白銀のやうな鬚髯をなでゝ、さすがに悅ばしそうに、くつろひて居ましたがやがて微醒を帶びた顏をあげて、

「や、どこへ行かしやつた。あの客人は、」
「和尚さま何と云つてさつしやる。お客はと云つだら前でも後でもあなたたつた一人だに、」
「否、そうぢやござるまい。最初から嫁に達に、つきそつてござつた、立派なお人ぢや。」
老夫婦は何と思ひあたつたか、顔見合はせて色を失ひました。少女は何か云はぬので、只新郎は事もなさゝうにうち笑つて、
「多分貴僧の思召ちがひであらう。否そうに違ひない四人しかない無人島に、たとへ招待したいと云ふても山の靈が湖の靈より外、よばれる人はないてはないか。」
快活に云つて打笑つたのてすか、少女は何故か俯向いてしまひました。
其あくる朝はからりと晴れて、煌わたるあさひの光は、新郎新婦の閨の戸を目映いほど白くさしました。とうにめさめて居る新郎は、夢として、みるともなくみれば、自分の新妻の美くしい罪のない其寢がほ、はて昨夜の怪は夢をみたのか知らぬ、物に魘はれてもしたのか知らんどうしても夫に違ひないと、強て考へ直したのですか、いかにしても動悸が治らぬのです。夫は昨夜ほの暗い行燈のかげに、ふとみると俄にそひふして居るの、愛妻てはなくて、こは抑夢か錦の紐をみるやうな、小蛇が蟠つて居るのでした。呀と思つて思はず片膝たてると、深更ですから寢耳ともひゞいたとみえて、可愛らしい息をして、枕をきしらせて寢反りしたのは、やつぱりかはらぬ我妻でした。
それから今朝までどうしても眠れない、殆ど霧の中を彷徨ふやうて、どう考へ直しては不審がはれぬ。が目さめての初々しい妻の動作、どこまでも無邪氣く、我まゝを言ひ散して居るのをみると、どうみても元の少女に相違はない。すると復昨夜から今朝にかけて疎ましく、疑ひ迷つたのか、何だか罪な、すまぬやうな、心地もする。
結婚がすんでから少女は、相異らず大の元氣て、兩親にも甘へれば、まゝにも調戯けたりつたり、愼ましい



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

所恥しげな所が更にみえません。少女を膝下へよびよせて、幼い人を說きさとすやうな口調で、
「和女はもうもとの我まゝな、少女時代ではござらぬぞ。立派な男を有つて、互に樞携る〻經束をかためたりや、婦は夫に隨ふと云ひつとめ義務第一大切ぢや。よく母さまにきいて家政の事をみ習ふて、女一通のことは恥かしからぬやうな貞實の、人にならつしやれ。人間はこの肉體より靈魂が尊いのぢや、夫の魂妻の魂結びついて離れぬやうにならねば、完全の人とは云はれませんぞ。」

少女は何に感じてか、思ひ入つたやうに首うなだれたのですか、白い額には油汗かにじんて、館ねて垂た黑髮の、末も顫ふやうにみえるのです。

「魂々、靈魂は尊い美くしいものてしやうが、さぞ又夫があるために恐ろしい目にも遇ふてしやう。凡そ此世に生きて居るものは、魂のない方が、却て幸福てあるのてすか。又不幸福てあるのてすか。私このことを思ひだすと、胸がさけるほど苦勞になるのてすよ、よく理解るやうてはなしてきかして下さいな。貴僧、今まては何の苦勞も、一回知らずと面白い世と思つて居たのに、重い重い苦梵を、之から私はするのてしやうねへ」

少女か今まで曾にないこと、熱涙はとめどなくはふり落ちて、繿縷の袖を噛んだまゝ、音聲をたてゝ泣き伏したのです。

僧は大方ならず驚かされて、若これは氣が狂ふたてなくは惡靈につかれたが、不憫な女どうか本心に立ちかへるやうにと一心こめて默禱すると、少女もそこにひれふして、何ことか瞻想えて居つたのてず。このてきことを、家內中の人は毫來も知らず氣かつかぬのてした。沈默家の老僧が、決して人に談しませんから誰も知つて居る筈はないのです。只少女は夫から後、生れかはつたかと思ふほど、性質が異つて、老親が何か命すれば、すぐ柔順に立つてする。過失をして責められても、決して今までのやうに口ごたへはせぬ。夫に向つて萎れた花で、相かはらぬ美くしさはあるがどことなく物思はしい浮かぬかちの顏色てあるので、情深い兩親も、大人しくなればなるで、又どこか異例のではあるまいかと心配します。夫はまして、密かに思合はせることの無いでもなし、いつか心の霽るゝやうに、よく物云ふて慰撫めてやらうと、思ひ思ひ一日一日と送つて居たのてした。（次號完結）




Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

# ラオダマィア夢物語

櫻喬生

悲曲ラオダマイアは人も知る如く湖畔詩人の中樞たるチーヅチースの叙情詩にして、材を希臘の古傳說に取り、萬有神教的思趣を以て熱烈なる愛と勇士の最後とを歌へるもの也。一度此の篇を讀みたるものは、必ずや其が美しきロマンチシズムの詩趣と高潔純美の愛とに接するならむも、此の一篇の如き他の數十百餘の作品に比すれば珍らしき迄情緒の錯綜せるものあるを覺ふ。尙ほ一篇の悲曲を通じて個人主義の思想と國家主義の思想との衝突を窺ひ見るべく、移して以て現時の我が詩壇に移うるもすゞろ原詩の東洋的作物に非ざるなきかを疑はしむ。ましてや日露の大戰終りて、我が國家庭の現狀が此の種の境涯にあるもの少からざるをや。親に別れ子に先だて、良人を失ひ兄弟離別の悲しみあるもの、誰かラオダマイア一篇の悲曲に同感の情を否むべき。むしろ一掬同情の涙を辭せざるべきを信ず。

東の空うす雲なびき、曉の色なほ小鳥の夢路を守る朝まだき、貴き供養の數々を盡してラオダマイアの姬はすぎにし脊の君か懷かしき御顏ばせ優しき御言を今一度もがなと、天地の御靈さてはヨーブの御神を伏し拜みひたすらに祈念し給ふしほらしさ！

燃るが如き一念愛慕の情は、今し貴き信仰の力と合着して姬は美しき雙手を神の御座近く合掌しぬ。この刹那一點の光輝は姬の顏容を飾りて眼の色さへ輝きて見えぬ。あはれ其の美しさ、紅おぶる朝の御光り、薄雲なびく曉の御空を破りしにも例へつべきか。呼動の響きは高けれど自ら四肢の伸びたる心地して靜かに時の來るをば待ち給ふ。

あな畏ろしの光景や、姬はそも何をか認めし!?

おゝ悅ばしの御樣や、姬はそも何をか認めし!?



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

すぎつる月日も夢なれや、トロヤの礒邊に敢なく討たれ給ひし脊の君こそ今し天降り給ふには非ざるなきか。さはれ生れながらの現御身に見えますものぞ。具體の御姿にましますものぞ。

もしや姫の感覺に誤りなくば、それこそ懐かしの脊の君なりとは確かめ玉ひつらん。見よ羽色も清きマルキユリーの神は今し彼を導きながら御空わけつゝ天降り給ふなるを。

優しきヘルムスの導者は恐怖の暗路を掃はむ心にもや、神秘の魔杖もて靜かに姫が身上に觸れ給ひ、さて、

『ラオダマイアの姫よ、ヨーブの御神は爾が切なる願を受納ましまし、今し良人を地上に降して三時間の歡樂を與へ給へり。いざ親しく積る思を語り給へ。夢思命を仇になし給ひそ』

姿はやがてひら〱と天上さして雲がくれ給ふ。

姫は歡喜の色包みも敢えず、思はず駈け寄り躍り立ち、あな懐かしや我が脊の君と抱き付き給へば、具體の御姿と見しは幻、空しく虚空を掴むでさわるべうも見え給はず。姫は駈けより飛び付き給へど姿は元の幻幼にて、合ふては分れ分れては又合ふ。あゝ別るゝは是あはんが爲の涙なるか。

かくて美しき御姿は再び姫が眼前にと現はれぬ。

「おゝ我が生命と頼むプロテシラオスの御君、導者の御神は既に去に給ひぬ。我が肉聲に覺えしあらば御身の確かなる記號を示し給へかし。此處は我等が宮居にて彼處は御身の帝座なり。玉の樓臺もさこそ喜び迎ふらむ。いざ語り給へ、語りて淋しき宮居を賑はし給へ!!

プロテシラオス靜に口を開き給ひ、

「おゝラオダマイア、御神の御業天の御恵み、夢疑ひ給ふべからず。我れ果なき幻の姿と見ゆれど誓て御身を

惑はし恐れしめんが爲には非ず。天なる御神は只汝が貞操の一念をば賞で給ひしぞかし。我は勇敢の思意として、雲の彼方天上無窮の幸福を樂しみつゝある也。

汝も既に聞きつらん、デルフアイの神託にはグリース軍勢の中にてトロヤの濱邊を第一に踏まむものは必ず死すべしと也。されど斯る豫言も我を恐れしむるには足らざりき。大義の御爲には犧牲となるをも辭せざりき。我は勇さみに勇む駒に鞭ちトロヤの砂地に馳せ上りぬ。かくて獻身の我――神に捧げし此の身――敵將ヘクトルの爲に敢なき生命を落してけり。」

きくより姫は悲しさやるせなくも、

おゝ勇敢無雙の我が夫、比類稀なる義勇の一念、おゝ我身とて此の上嘆き悲しむの愚をなすまじ。思へば一萬の軍勢共、たゞすら疑懼の暗路を彷ひ歩けるの時、我が君こそ勇て最後の濱邊にと駒をば急がせ給ひしか。あはれ其の刹那の御心、思ひやるだに胸は迫りて我と我が涙とゞめもあへぬ切なさよ。かくまで勇ましき我が君なれど、心優しく同情に富み給ふこと露勇敢の德にも劣らせ給はず。さればこそ御神も墓場の悪意をば許し給ひつれ、あはれ、鬢髮房々しき御姿、唇美しき御顏ばせ、天津御空も爲に香しき薫りをば增しぬらむ。

さるにても懷かしの御姿や、御身こそ必定幻にてはおはさぬべし、よもあだなる影にてはましますまじ。おゝ戀しの我が良人、なつかしの我が君、來りて暫し御手を貸し給へ、幾世寢ざめの床の上に、來りて溫き妹脊の接吻を與へ給へ、さるにても今日といふ今日、今といふ今、妾こそは再び新妻の心地し侍る。いざ我が脊の君!!　おゝなつかしの我が君!!



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

情は、いたく迫り來て、言葉も自と熱し給ふを、天にましますヨーブの御神、此の樣をや厭ひ給ひつらむ、神通の力もてるバルシーの女神に命じて、あはやと見るまにプロテシラオスが紅なすローズの口邊に地獄の色を投げしめ給ひぬ。

プロテシラオス靜かに我が顏を指しつゝ

この面容こそは我運命すでに去れるの兆なるぞ、肉感の快樂今にしてもし眞に恢復し得たりとせば、今みし我身の德も水の泡、誠や現世の勢は久遠の歡喜を破滅して、正しき來世をも輕視めり。平和けき快樂も既に無上の苦痛を豫想せりと覺ゆるは如何に!! おゝ我脊の君、暫し御手をかして我胸深くもつれゆく情熱の火を鎭めしめ給はずや。神は一念深き我胸の思を嘉納し給へり。さるにても制し難き切なる愛慕の一念、あはれこを如何に、かすべき…………。おゝ窗なるは我住居なり、我れ今みまかるともなどてか悲しみ嘆くべき!!

「などて御身はしかく果なきことを宣ふぞや。

昔しヘルクユールは墳墓の怪物アルセスチスを屈服せしめ一度骸となりし人の命を再び地上に奪ひきては花の如き青春の情をわかしめしときく。又メディアが口にせる一節の呪文は老の波をば散せしめ、イーソンは若者と伍して久しく不老の友たりしと傳ふるに非ずや。

神は常に惠を人に下し給ふが中にも、猛き心を和けしめ給ふはそが最も著しきものぞかし。み給へ、腕の力魔術の業にもまさりて能く日月を支配するものは、一念深き愛戀の情はおはさずや。よし悲境に苦しむことの多くとも。よしそが――御身の如き――可弱き婦人の胸に宿るとも…………。」

いな〳〵我君にして、もしや上天し給ふことのおはさば、その時こそは妾も御伴に加へしめ給へ!!

《折しも姫は「神よ平和を降さしめ給へ」と祈り給ふ脊の君の語に耳かたむけ、つく〴〵と顔打守りて喜び給へるも理りなりかし》

暗黒の色に包まれ給ひしプロテシラオスの御姿御顔立、いつしかローズの紅をおびて御振舞さへ花やかに、一點沈靜の氣をおび給へる美しさ、迚も人界のものとも思はれず。

プロテシラオスは靜かに愛を物語り給ひぬ。そは靈者が淸らなる御園邊、はたしは自由の風薫る天上の樂土にて始めて感知し得べき眞の愛ともいふべくや。されば消え失せんず憂もなく、過にし樂しみ未來の希望も夢消え失せんず恐れなし。

如何に美しければとて天上ほどのもの此の人界にあるべきや。思ふてもみられよ、銀を欺く淸らの小川、たのしき空氣、神さべる御空、紫色のひかりまぶしき野路の樣、さりとてこの世にみるべしとも覺えず。大空に輝き出る日の光りは下界の人の望みうる所ならんも、天上淸き常世の風土、よも察知し得らるべきものに非ず。

されど大神の授け給ひし靈魂のみは吾等が磨きし德の光に導かれて天上秘密の世界を窺ひみるを得べし、プロテシヲォスの君は重ねて言葉を續ぎ給ひ、

今こそ我身は人間生存の終局をば悟り得たれ、一度幽明所を異にし御身が日夜涙を唯一の手綱とせる間に、我は夢の如き現世の快樂果なき宴のむしろをはなれて眞如の雲にいりたるなり。

あれ見られよ、血氣にはやる家の子郎黨等しく殿の氣風を受けたりと覺えていと勇ましくみえぬ。なかには兵杖を携へたるもあり、あるは又テントに座したるもあり。おの〳〵榮ある冒險の企てに準備の氣合急はしと見ゆるを殿と國王とは評議の席に列なりて思ひの眉をひそめ給へり。艦隊は今しアウリスの港に碇を下せり。

〔註〕史に曰、此の時神怒烈しくして風全く止む。衆議は一決して遂にアガメノンの愛女を犧牲として神に捧げぬ。此に於て始めて神の



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

怒りを解くことを得たり。

待ち設けたる風、そよ〳〵と起れば船は矢をいる千里のすゝみ、鏡なす海、玉と散る波、みるも心の靜けさぞ、我は獨りかのデルフアイの神託に熟く〳〵と思ひ沈みて竊に胸をば苦しめぬ。

もしや數多きグリース軍勢の中にて我に先んずる勇士あらば、我こそ自餘數百千の艦隊に先だちて、先登第一敵の濱邊に押し寄せくれん。トロヤの濱邊の染めなす血潮は誓て我身の熱血なるべし。

かく心の臍は固めたれど、我が亡き後の妻が悲しみ、おゝ、その嘆きを思ふの刹那、悲しみの征矢一時に下る心地して殆ど耐えがたき思ひに沈みぬ。さるにてもいとしの我妻！　思へば手に手を聯ねて語り歩きし庭の細路、――おゝ湧きくる泉　咲き匂ふ草花、――新に設けし市街も、工營半なりし樓臺も、あはれ昨日の如く我が眼前にきらめくよ。

さりながら、禮にならわぬ敵の奴原は「あれ見よ、グリースの大軍等しく怖れおぢたるぞ。一人の死を犯してトロヤの濱邊近く寄せくるものなきか」と、高慢不遜、罵詈讒謗を加へんは必定、あゝこの耻を如何にかすべき。千々に亂るゝ心の奥、忽ち一點の高火胸深くわき起りて我心既に決せり、我は立て矛を採りぬ。

あゝ誠の念、愛戀の情、御身如何に强ければとて、思へば果なき露の命、ましてや理性のひかり微かにて自治のこゝろに弱きは女性の習ひなるを、我はたゞ剛毅の手綱によぢ上りてうれしき再會を來世に待たんとは定めたる也。

冥界の神々も必定御身に同情を與へ給ふべし。「願くは御身をして高き淸き無窮の愛を宿さしめ給へ。」我は心よりかく祈りを捧げたるなり。

おゝ人間固有の渴仰、あはれその渴仰こそ人をして向上の光りを認めしむるよすがなれ。かくてぞ眞の愛は



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

與へられん淸き愛は授けられむ。これが爲には人間情熱の湯は時として過激に沸騰する時もあるべし。——自己の沒却することもあらん——然なりその羈伴こそ眞の愛に向ては、たゞ夢の夢、空の空、徒なる縛とこそはいふべからん。

俄然姫は聲高に叫び出でぬ、そはヘルムス神の再現を認めたるなり。

姫は別るゝことのあまりに悲うて、良人の袖に打すがり、嘆き給へと詮術波の時は來れり。さしも短かき束の間も思ひこがるゝ二人が身には長き年月とこそは覺えけめ。されど天上遠くさまよう靈には、人間の力もて動かすべうもみえず。かくてプロテシラオスの君は、泣きくづをれ給ふ姫が姿を後に、天門指して音もなく舞ひ上り給ひぬ。

あはれ人類の往來の衢ならぬ悲しさ、姫は天の御國を今更の如く打ち仰ぎつゝ、唯茫然と後打ち守り給ひしが、せき上る胸の悲しさにや耐え給はざりけむ、館の床の上がつばと打ち倒れて、あはれ其の儘息の通路も絕え給ひぬ。

* * * * * * * * *

おゝ、愛情の濃かなること人爲以上なりし姫が哀心——よしや理知の命をこそ否み給ひつれ、一點罪汚の影もなく、——熱情わきて燃え上り、果ては身を殺し給ひし優しの心根、友よ靜かに姫がみこゝろを思ふても見られよ。

あはれ浮世の苦しみ煩ひ繁き縛を遁れ出し姫が尊き御靈こそは、榮光みち〳〵たる天の御園に靜けく匂ふ惠みの草花萌めんと、良人の跡をば追ひ給ひしなれ。其の心根の如何てやさしうも又なつかしからてやは。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

思ふに涙の熱もてあはれの人を弔ふは、これぞ人間至當の法、一度破れ覆れる人の希望は、亦我と心を同ふする人によりてこそ悲しみ慰めらるゝものなれ。されど悲しみ憂ふるもの、たゞ〳〵人間とのみ限るべきや。

傳へいふ、ヘレスポンドのかなた塔狀なせる樹林の一群、姫が生命をかけて愛し給へるプロテシラオスの墓地の外れに新しき芽をふきいだせしが、幾年月をすぐると共にいと美しう生ひ茂りぬ。

さるにても奇しきはこの綠りの樹林、やがてトロヤの城樓を望む程の高さともなれば、不思議やその尖端とみに凋みおちつ、かくて生育と枯凋とは不斷の辭を換しつゝ生ひては凋み凋みては又伸ぶ。廻り廻れる小車の年月ともに變ることなきいぢらしさ!

あはれ、悲し味を知るやさしさは、無心の草木にも具はれりとこそ人々今にいひ傳へたる。(完)

### ◉記者より讀者諸子へ

前號卷頭所載此の身體を如何にすべきか」の一文は少からぬ誤謬有之やにて幷深氏より訂正方申込來り候に付き、記者は此に改めて記事全文の責に任ずることを告白すると同時に幷深氏及び讀者諸子に對して深く粗漏の罪を謝す

# 次號卷頭豫告!!!

マリー、ライオンの敎育主義………丹羽清次郎氏

熱心なるクリスチヤンとして米國女子敎育家として令名嘖々たるマリー、ライオン女史は現に亞米利加某女子大學校長として理想的敎育主義の貫徹に全力を注げるの人、今や日本基督、敎界に於ける最も眞摯温健なる紳士として青年子女の敎化に熱誠なる丹羽先生の筆に依りて縱横に論評せられんとす。久しく沈滯の悲境にありし本誌も金風鏘々たるの時機と共に必ずや一倍の活氣と生鮮の氣とを發揚して餘りあるべし。記者は十一月號卷頭の讀み物として讀者諸子に推擧するの榮を喜ぶ。

此の外尙ほ大森氏の體育論、秋田雨雀氏のアーノード詩、德富蘆花先生の談話、川副櫻斎氏の「爾の信仰爾を癒せり」の一文掲載せらるべく、ミス、マクドナルド幹事も例に依て金玉の一文を寄せらるべく、思ふに次號の本誌は枯木肅殺たる人の胸に千紫萬紅の異彩を放て餘りあることゝ信ず。

# 編輯室より。

▼本誌卷頭掲載「西風吹けよ」の詩句は有名なるロマンチシズムの詩人パルシー、シエレーの「オードツー、ウエスト、ウヰンド」の第一節を記者が舊稿より。拾取したるものに候。シエレー心内の熱情は靜然躁發して此の一詩となれり。飄蕩洒々たる風趣の至る所にほの見ゆるも至當の事と存候。吾人は衷心肅殺たる西風が此の世のあらゆる罪過を掃蕩し、水よりも雪よりも貴き精靈のバプテスマを天地萬有の上に與へむことを熱望するものに候。

▼本號卷頭には德富蘆花先生の一文掲載の筈に候處記者都合ありて往訪の時を得ず、折角の御約束もお流れと相成り候こと返す〲も遺憾に存居候。何れ近き未來に於て讀者希望の滿たさるゝ折の有之べくと信じ居候、尙又前號豫告中大森氏の體育論秋田氏のアーノードの詩は紙面の都合に依り次號に廻すの已むを得ざる場合に立ち至り申候此の儀改めて筆者及び讀者諸彥の御寛恕を願上置候。

▼本誌十月號より、雜誌は廣く讀者を天下に求め大に吾人の抱負と主張とを貫くべき畫策を立て申候。従て本誌を利用して廣く各種の社會に知己を求めらるゝ商店會社も少からずと存候。此等一切の廣告は爾後奮て本社に於て引受け可申候不拘多少御依賴願上度候。不乙。

(以上十月十三日)

# 祈禱の週間

來る十一月八日より十四日までは世界各國に於ける女子青年の爲め祈禱を捧ぐべき時機である。希くは日本に於ける各地の女子青年會員諸姉は此の際成る可く特別なる集合を開いて世界同胞姉妹の爲に熱心なる祈禱を捧げられんことを望む。

此の一篇はロンドンなる萬國基督敎女子青年會より出版せられた“Week of Prayer.”を抄譯したるものであるが、辭足らずして其全意を盡さず、加ふるに記者は此の一篇を十一月號に採錄する豫定で既に十月發刊の西風號の校正印刷をも濟まし、、、ホット一息吐いている最中、女子青年會本部なるマクドナルド孃より十九日の夜半俄かなる急使が到來して、「祈禱の週間は是非どうにかして今月の雜誌に入れて貰はねばならぬなぜなら來月、雜誌が出來上る時分は祈禱の週日は既に終結して居るのだから」とのこと、已むなく一生懸命に筆を馳せて廿日の夜半孤燈の下獨り筆を進めた結果は只今漸く印刷配布の手續を了することゝなつた。何せ

## 附錄第壹號要目

○祈禱の週間に就て……………………櫻香生
○日曜日(十一月八日)……………………讃美。祈禱
○月曜日(十一月九日)……亞非利加諸州の爲め…祈禱…ケープコロネー
○火曜日(十一月十日)……南北アメリカ人の爲め……………祈禱
○水曜日(十一月十一日)……亞細亞諸州の爲め…日本支那……祈禱
○木曜日(十一月十二日)……………濠洲諸聯邦の爲め……………祈禱
○金曜日(十一月十三日)……………歐洲諸國の爲め……………聖句朗讀
○土曜日(十一月十四日)……英國及び東部歐洲人の爲め……讃美。祈禱

よ急卒の際であつたから譯文粗硬、澁滯の節も少からざるべし、此の儀は豫め讀者諸姉の寛恕を願つて置く。《櫻香生》

其の名は聖く《路加傳一章第四十九節》

願くは爾名を尊崇させ給へ。《馬太傳六章第九節》

祈禱は能く人の心の結氷を溶かし、限り知られぬ神の潮流を狭き陸地に遮られたる灣内に導く心的發展とも見るべきであらう。

おゝ祈禱、之れあればこそ我等は罪深き身ながらも尙ほ神の御膝に近く侍るを得るのである。

生命の眞理、我等が進むべき通路、おゝ祈禱こそは神の御座に近づく雲の楷梯とも云ふべきか

父なる御神、希くは如何に祈るべきか我等に其の道を敎へしめ給へ!!

## 日曜日（十一月八日）

天地萬有の主宰にして我等人類の父たる聖なる御神——願くは爾名を崇めさせ給へ。

默示錄四章第八節。以西結書三十九章第七節。サムエル前書二章第二節。出埃及記十五章第二節。默示錄第十五章三節四節。

讃美——我等はエスキリストを神の獨り子として絕對に神聖なるものとして頌しまつること。

祈禱の要目——我等一人なるも他人と共に居るも聖靈の御力に於て我等の神は萬有の主宰、人類の主權者にして絕對の權威と至高の人格とを具有し給ふてふ確信を以て總ての事に當らんことを希ふこと。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

## 月曜日（十一月九日）（亞非利加諸州の爲に）

我等心靈の燈火にして又平安の源たる聖なる御神、

イザヤ書六章三四五節マデ。約百記四十三章五節六節。イザヤ書第五十七章十五節。チツス書第一章二節。ヘブル書第六章十七節ヨリ二十節マデ。約翰第十七章二節。

祈禱の要目――神の精靈我等の上に下りて此の祈禱の週日の間、特に此の罪多き取るに足らぬ我等を導き、我等心靈の中に一道の紅火を與へしめ給ふやう。又神の眞に淸らなることを認むることに依て强固なる慰安を歡受することの出來得るやう。各自が罪の贖として十字架上に血潮を流し給ひしエスキリストの中に心からなる隱れ場所を取ることの出來得るやう祈禱を凝らすこと。

### 南亞非利加

ケープ、コロネー。希くは諸姉が各種の製造場及び工場に於ける女工達の爲に起されたる倶樂部、或は支部將來の發展の爲に或は又神の事業の爲に或る活動を試みつゝある委員監理者の上に大なる恩寵の加へらるゝやう、ケープ、タウンに於ける組合が其の市に於て充分神の御力たることを得て漸次多くの婦人女子を薫化し其が中心生命に向て密接に相接觸する日の速に到達せんことを心より祈禱せられんことを望む。

## 火曜日（十一月十日）

主として南北亞米利加人の爲に勿論加奈陀合衆國をも含む

聖なる御神――其の意志に於て乃至は聖句に於て活ける言葉の中に自らを明白に顯現し給ふ御神。

約翰傳第一章第十八節。ヨハネ第一書三章第八節。ペテロ前書第一章十五節。ペテロ後書第一章二十一節。ヨハネ第第十七章十七　。ローマ書第十一章第二節。

祈禱の要項——無言なる神の貴き默示に接したるものは神の精靈の敎化の露に潤ふことを得るのみならず、確固不拔の精神を以て聖書に對し日々の生活に於て限りなき富と力とを歡受することを得ること。幷に我等は又進て他人の暗黑面を光明あるものとし、惡鬼の魔力も之を生ける神の力となすことを得るやう心を一にして祈禱をなすこと。

## 水曜日（十一月十一日）（亞細亞諸州の爲め）

聖なる御神——希くはキリストの十字架に於て妙なる御力を顯現せしめ給へ。

詩篇第八十九章十九節。ローマ書三章自第二十二節。至第二十六節。イザヤ書四十五章第二十一節。ヨハネ第一書一章第九節。

祈禱の大要——我等の團體は祝福の御手を授け給ふ神の榮ある福音を貴き精靈の顯現せるものとして深く自覺することに依りて層一層の隆盛を來すこと、幷にキリストを信ずるものは今日と雖も尙ほ解脫の境致を樂しみ神の大偉力を感知することを得ること。斯くして我等の愛する本國のみならず他國に於ても亦救主キリストの下に多數の姉妹を集め得るやう熱心に祈念を凝らすべきこと。

支那——青年會の種々なる事業及び此の國に渡航せんとする同胞姉妹の爲に、或は又支那政府が此の地の青年會事業の爲に出來得る限り助力を與ふるやう。殊に香港及び上海に於ける傳導事業の爲め乃至は支那全國を通じて各地に散在する支部の爲に心よりなる祈禱を捧ぐること。

日本——新京九月に於て開始せられたる女子寄宿舍の爲に、其の信者たると否とを問はず一般日本女子學生の爲に祈禱を捧ぐること。又先年四個の學校に依て成立せられたる新らしき一團體の上に乃至は思ひ〳〵に聖書研究に從事せる各種學校の敎職員生徒の熱誠なる精勵に對して或は又從來個々別々なりし生涯を集中して互に一致結合するやう土地の遠近を問はず一意他人の利益幸福を圖るやう、又今夏東京青山學院に



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

於て開かれたる第三次の夏期講習會に於てキリストイエスの生命と力との著しく顯現せられたる恩寵に對して心からなる祈禱と感謝とを捧ぐること。

### 木曜日（十一月十二日）（濠洲諸聯邦の爲）

聖なる御神——我等は今し御試みの中に彷徨ふ。

詩篇十八章第三十節。詩篇百十九章第七十五節。ヘブル書十二章自六節至十一節。コリンタ前書十章第十三節。ヘブル書七章自二十四節至二十七節。

祈禱の大要——悲哀（カナシミ）の中、試みの中にある總ての人々をして神の道を圓滿充實せる新らしき確信を得しむるやう、我等すべての者が此等誘惑の中にありて試み苦しみの生涯を送れる人々と共に優に美なる同情を以て我等の大なる救主と同一心靈を持つことの出來るやう祈念すること。

（特にニユージーランド、ヴキクトリア州にある同胞の爲に祈念せられたし。）

### 金曜日（十一月十三日）（歐州諸國の爲）

聖なる御名によりて——主を崇め四周の國人を喜ばすべき大なる職責を果すべきこと。

詩篇第九十九章第五節。同三十章第四節。以西結書二十章十九二十節。默示錄一章第十節。詩篇九十六章第八節第九節。ヘブル書十章第二十五節。エペソ第四章第六節。

### 土曜日（十一月十四日）



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

聖なる御神――奉仕の一念をして我等の内心深く燃やさしめ給へ。

イザヤ書六章自三節至八節。使徒行傳二十二章十四十五節。チツス第二章第十三十四節。

讃美――精靈の妙なる加護の下に此の一週の祈禱を通して神の聖なる幾分にても廣布することを得ると同時に、神の子たるエスキリストの人と爲りに就て充分に說き示すことの出來るやう、又神の意思は其の子エスキリストの聖化なることを記して讃美すること。

祈禱の大要――總て我等が斯くして見たる所のものは榮光充ち滿ちたる主と堅く相接觸する結果なること、又我等の團體を通して何處にあるも――其の本國たると外國たるとを問はず――活躍奮記せる奉仕の一念が單に口端のみならず其の根底に於て熱心なる反響あらしむること、又「我此に在り、我等が日々に祈れる諸邦に於て其が職責を果すべく何時にても我を送り玉へ」「神よ希くは御名を崇めさせ玉へ………神の國を地上に來らせ玉へ………」なる意味にて熱心に祈念を凝らすこと。

此の日は主として英國伊太利其他東部歐羅巴の諸邦の爲に祈るべきものとす。

# YOUNG WOMEN

OF

# JAPAN

*Vol. V.* *October, 1908.* *No. 9.*

Miss M.A. Whitman, Chairman

Dr. Kei Okami, Vice-Chairman

Miss A.G. Lewis, Recording Secretary

Mrs. G.M. Fisher, Treasurer

Miss Michi Kawai, Active Member of the World's Committee

Miss Sumi Miyagawa, Corresponding Member of the World's Student Christian Federation

| Resident Members | Non-Resident Members |
|---|---|
| Miss A. B. West | Miss K. Tristram, Osaka |
| Dr. Tomo Inouye | Miss N. B. Gaines, Hiroshima |
| Miss Hama Hirano | |
| Mrs. Hana Ibuka | |
| Mrs. Koharu Nakajima | |
| Miss Uta Suzuki | |

Miss A. Caroline Macdonald,

General Secretary

Headquarters:— 15 Dote Sanbancho, Kojimachi,

Tokyo



Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治三十七年五月七日第三種郵便物認可

# YOUNG WOMEN OF JAPAN

*Vol. V. October 1908. No. 9.*

## CONTENTS

Let your Laughter be Turned into Mourning....
Freedom and Truth ........Pure Love . . . Editor
An Experience of Terror....... ......S. Otsubo
Browning's "Saul" ...............Michi Kawai
A Poor Mother and her Daughter ....K. Kawazoe
Mr. Uemura's Address on the "Choice of a Religion"
.................................T. Kiyama
The Water Princess (continued) Yasu Tsujimura
Matthew Arnold's Poems ..............U. Akita
Wordsworth's "Laodamia". . Translated by Okyosei.
The Week of prayer.

東京神田美土代町三秀舍印行



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA